

閻魔王朝ものがたり

忠之の場合　く殺人く

(173)

次の被告人は高齢の男性だった。85歳くらいだろうか。忠之と呼ぶことにしよう。

忠之はどう見てもここに来る人間ではない。明らかに高い霊格で、もうすぐ人間の転生を終了するのではないか……と思える位置にいる。性格も穏やかだし、善行もたくさん積んでいる。どうしてここに来たのか？　と、ミス疑ってしまふほど、その場にいることが不自然だった。

閻魔様の前に連れて行くと、閻魔様も目を丸くして驚く。

「お前は……とうの昔に地獄を卒業したはずだ。なぜここに……？」

しかし、司命が読み上げた罪状は……殺人だった。

法廷内がざわつく。5人の補佐官もその眷属も司命も司録もみんな忠之を知っているらしい。忠之は静かに目をつぶっていて、その姿は潔く覚悟か決めているように見えた。

何か特別な事情があったのだろうか……と誰もが思った。金銭目的や、抑えられない怒りで殺人を犯す霊格ではないからだ。とりあえず状況を見てみよう。

忠之は大学を卒業して機械メーカーに就職している。29歳で結婚。ひとり娘を授かり、郊外に家を購入して、妻子のた

めに頑張って働いた。部長まで出世をした忠之は、定年まで勤め上げた会社を退職すると、その後も少し働いて、それから悠々自適な毎日を送った。忠之の人生をざっとかいつまんで説明するとこんな感じだ。ごく普通の善良な市民である。そんな忠之が殺した相手は……彼の妻だった。

忠之と妻は京都で出会った。その時、忠之は25歳、妻は23歳だった。忠之が京都御苑を歩いていたら、前に行く女性が何かを落とした。「落としましたよ」と声をかけたが、少し距離があったせいも、聞こえなかったよう。女性は気づかない。女性が落とした物を拾って見ると、それは手書きの地図だった。

大事な物だろうと思った忠之は小走り。女性に追いつき、「はい、これ。落としましたよ」

と、渡すと女性はにっこり微笑んでお礼を言った。可愛いなあ、と思ったがそれだけだった。

その日の午後に金閣寺を訪れると、さきほどの女性がまた前を歩いていった。忠之も一人旅だが、どうやら彼女もそうらしい。女性は忠之に気づくと「あら」と照れたように言って、会釈をした。忠之もペコリと頭を下げた。偶然であるんだな、と思ったが、その時もそれだけだった。

翌日、嵐山の渡月橋でまたしても彼女とばったり会った。さすがに三度目になると、お互い無視もできず、会話を交わした。景色が美しいですねとか、どこから来たのですか、などと話しつつ、そのままお昼をともにし、連絡先を交換して……そこから交際が始まった。

彼女はとても可愛らしい女性だった。ころころとよく笑い、忠之の話を楽しそうに聞いた。一緒にいると癒されるタイプなのだ。さらに、一步下がって忠之を立てる奥ゆかしさもあり、そのうえ聡明という、非の打ちどころがない女性なのだった。

4年ほど交際をして2人は結婚した。可愛い娘も生まれ、一戸建ての家を買い、幸せを絵に描いたようだ周囲からも羨ましがられた。妻は専業主婦で忠之に尽くし、いつも笑顔で家において家庭を守っていた。娘は両親の愛を一身に受けてすくすくと成長した。毎日、家に帰るのが楽しみで仕方ない、そんな家庭だった。

娘が就職をして海外勤務になると、夫婦2人の生活が始まった。一緒に映画を観に行ったり、美術館めぐりをしたり、時にはディナーで贅沢もして、夫婦だけの生活をエンジョイした。いくつになっても仲が良く、2人ともよく笑い、よくしゃべった。

娘は赴任先のアメリカで国際結婚をしたので、年に1回しか会えなくなったが、娘が幸せだったら寂しくても構わない、自分には妻がいるし……と忠之は思っていた。

定年退職をして嘱託で5年ほど働き、それから妻と2人でのんびりゆったりと暮らした。

庭に小さな家庭菜園を作り、パソコンも2人で教室に通って使えるようになった。穏やかに、そして静かに、平和な日々が過ぎていく、そんな理想的な老後だった。

穏やかな日々を壊す病

そんな日々の中で、妻が少しずつ変わっていった。怒りの感情を持っていないのではないか、というくらい温厚な性格だったのに、たまにイライラと忠之に文句を言うようになったのだ。それも、腹が立って仕方がないというふうに、大きな声でののしる。

意地悪を言うこともあった。たとえば、パソコンで文章を作っていてうっかり全部消してしまった時に、「偉そうに知ったかぶりをして、あちこちいじるからそうなるのよ。バツカみたい。天罰ね、ザマーミロだわ」と言って忠之を驚かせた。

いつも機嫌が悪く、どうしてこんなにイライラしているのだろう？ どこか体調が悪いのか、それとも年を取って家にもる日が多くなったからストレスがたまっているのか……と忠之は悩んだ。まさか性格が変わるなんてことはないだろうし、心療内科に連れて行ったほうがいいかもしれない、と思っていると、妻は同じことを繰り返して言うようになった。

あれ？ これはもしかしたら……と思っっているうちに、昨日のことを覚えていない、と衝撃の発言をしたりした。それはこんな会話だった。

「昨日、お隣さんが温泉旅行のお土産をくれただろ？ お返しをどうしようか？ 家庭菜園の野菜でも持って行くか？」

「はあ？ 昨日？ 昨日は誰も来なかったでしょう、何を言ってるの？」

「お隣の奥さんが来て、お前と30分くらい話をしていただ

やないか、旅行の話を……」

「いいえ。昨日は誰も来ていないわ」

「テーブルの上にあるお土産の菓子は……覚えていないのか？」

「あら、本当だわ。何？ これ？ あなたね？ どこで買ってきたの？」

忠之が慌てて病院に連れて行くと、予想どおり妻は認知症を発症していた。

忠之は目の前が真っ暗になった。これからどうなるのか、見当もつかない。その時、忠之はすでに80歳になっていた。

病院からケアマネジャーを紹介されて、介護サービスを受けることにしたが、他人が家の中に入り込むことを妻が嫌うため、ヘルパーは断った。デイサービスだけ週に2回ほどお願いすることにした。デイに行けばいろんな人と会話を交わすし、歌を歌ったり、ゲームをしたり、体操をしたりする。妻にとって良い刺激になれば、と思ったのである。

4〜5回ほど通ったある日のこと、妻は「行きたくない」とうつむいて言った。理由を聞いても話さない。意地悪をされたのか？ 嫌いな人がいるのか？ と忠之が問うが答えは返ってこない。本人が嫌がるのでデイサービスもやめてしまった。

ケアマネジャーは、「ショートステイに奥さんをたまにお泊まりさせて、忠之さんが休まないと、忠之さんのほうが倒れてしまいますよ」と心配してくれたが、嫌がる妻をそんなところに行かせるのはしのびない。困るような状況になったら、また利用するというので、介護サービスはすべて断つ

た。

しかし、妻の認知症はどんどん悪化していく。

次第に忠之のこともわからなくなり、「どなた？」と聞くこともあった。もちろん家事などはできないから忠之がすべてやる。掃除、洗濯、食事の用意、買い物……。

妻は排泄のコントロールができないほど進行しているので、リハパンと呼ばれる紙パンツを利用している。本人は汚れていてもわからないため、その処理も忠之がしなくてはいけない。妻はお風呂にも一人で入れないから、忠之が入れてやる。

一日が終わる頃には、ヘトヘトに疲れきっていた。それでも睡眠が取れば、なんとか頑張れるのだが、妻は夜も動き回る。たまに外へ出て行こうとするので、目が離せない。熟睡など二度とできない状況なのである。

忠之は心身ともに限界だった。だが、可愛い娘に迷惑はかけられない。娘も遠い異国の地で頑張っているのだ。相談をすれば余計な心配をかける。娘を悲しませたり、悩ませることだけはしてはいけない、と忠之は思っていた。

一生懸命に食事を作っても、妻は「何よ、これ！ まずくて食べられないわ！」と口からペツと床に吐き出したりした。そしてまた一口食べて嘔んで、ペツと床に出す、これを繰り返すのだ。

妻は病気なのだから……と思っても、汚れた床を掃除するのはしんどかった。口から出す時にうまく出せないから、妻の服も汚れている。忠之は妻を着替えさせ、それから床を掃除した。掃除が終われば、また洗濯をしなくてはならない。這いつくばって掃除をしているとふいに涙がこぼれた。あ

の可愛くて優しくかった妻はどこへ行ったのか……忠之は涙を拭いた。

2人で笑い合って過ごした日々が脳裏によみがえる。笑顔が素敵な女性だった。心のあたたかい女性だった。今、ここにいる妻は自分が愛した妻ではない……。

会社で嫌なことがあって落ち込んだ日は、ただ黙ってそばにいてくれた。一時の感情で、会社を辞めると言っても、文句を言うどころか「あなたの心のほうが大事だから」と言ってくれた。「私、まだ十分働けるし、3人で楽しく生きていきたいから賛成よ」と、手を握ってくれた。妻に苦勞をさせたくない、と思った忠之は会社を辞めず、齒を食いしばって頑張ったのだった。そんな愛に満ちた日々が思い出される。

床掃除が済んで洗濯機を回していると、妻がそわそわしている。見ると、パジャマのズボンを勝手にはいていた。たまにだが、妻は汚れたりハパンが気になる時があるようだ。ああ、自分で脱いだな、と思うと忠之は底なしの絶望感に襲われた。なぜなら、妻は脱いだりハパンを隠すからだ。

忠之はノロノロと寝室へ行き、タンスを一つずつ開けていく。ブラウスなどを入れているところにコップが隠されていたので、それを取る。パジャマが入っている引き出しは中がぐちゃぐちゃになっていたが、今はそんなことはどうでもいいと無視をした。

忠之の下着が入っている引き出しに、便がついたリハパンが押し込まれていた。このようなことをされると、そこに入れている忠之の下着もすべて洗濯をし直さなければいけない。妻の手にも便がついているに違いない。洗ってやらねば、と

思う。

あ！と、そこで忠之は思った。パジャマをはいていたからうっかりしていたが、妻は自分でリパタンをはくことができな。下着をはいていない、と気づいたのだ。これ以上、家を汚されてはかなわないので慌ててリハパンを持って妻のところへ行く。

「これをはこうね」

いつもなら「うん」と素直に従うのに、この日の妻はなぜか攻撃的だった。

「さわらないで！」

「パンツをはいていないと漏らしちゃうから」

「さわらないでって言ってるでしょ！」

妻は忠之の手を思いつきりはたいた。さらに、
「あっちへ行けーっ！」

と大声で怒鳴り、そばにあった物を投げつけてくる。投げつけてはいけないものがわからないので、置き時計なんかも投げそうだった。ガラスが割れたら、また掃除が大変である。

心神耗弱状態にあった忠之は、もうどうでもいいや、と思った。高齢の忠之には過酷すぎる日々なのだ。睡眠が足りていないから頭が常にボクツとしている。

忠之はソファに身を沈めると目をつぶった。どうしてこうなったのだろう……なぜこのような試練を与えられているのだろう……俺は何か悪いことをしたのだろうか……考えても考えても答えは出なかった。

忠之はしばらくぼんやりしていたが、洗濯をしなくては臭くてかなわないので、立ち上がった。ああ、そうだ、妻にリ

ハパンをはかせてやらなければ……と、忠之は重たい体を引きずって妻を探した。

妻はキッチンで排便していた。さらに、汚いということがわからないし、便がなんなのかそれすらも理解できないため……握って床になすりつけていたのである。

その姿を見て……忠之は泣いた。

子どものように声を出して、うわーん、うわーんと泣いた。泣いても泣いても悲しくてつらくて心の持って行き場がない。

誰か、助けてくれ！　とも思うし、妻が不憫でもあった。

地図を落としましたよ、と言って振り返った妻の、あの顔は一生忘れない。それくらい可愛らしく輝いていた。プロポーズをした時の嬉しそうな顔、娘を授かったとわかった時の嬉し泣きの笑顔、娘が生まれて名前を2人であれこれ考えた至福の時……。

いつも忠之のそばにいて、元気づけ、癒しを与え、一緒に笑ってくれた妻。忠之を一途に愛してくれた、世界一愛らしい大事な妻……。

その妻はもういないのだった。目の前にいる人間は妻ではない。忠之は自分がもう長くないことを知っていた。自分が死んだら妻はどうなるのか、娘に迷惑がかかるのではないか、この思いを娘にさせるのはあまりにも残酷だ、妻も娘に迷惑をかけたくないはず……。

気がついたら忠之は警察に電話をしていた。「妻を殺しました」と。

閻魔様の心の内

なんとも悲しいストーリーだった。法廷はシーンと静まり返っている。みんな忠之の気持ち痛みほどわかるからだ。しかし、罪は罪である。閻魔様が口を開いた。

「なぜ、殺したのか……」

「これ以上は、無理だと思いました。どんどん壊れていく妻がかわいそうだったし、自分も……限界でした」

「殺してはいけない、と良心のブレーキがかからなかったのか」

「かかりました。いけない、と強く思いましたが、心の声は無視しました」

「どうして」

「妻を楽にしてやりたかったのと、自分も楽になりたかったからです」

「殺された者が楽になるか？」

「いいえ、なりません……殺される時の感情次第で苦しむこともあります」

「そうだ、お前はそれを過去の人生で学んで知っている。それなのに手をかけたということは、お前が楽になりたいというエゴが動機だろう？」

「そうかもしれません」

「自分が楽になりたいから人を犠牲にする……それは霊格が低い者のすることだ」

「しかし……妻はもう人間ではなくなっていて、私も体力

的にも精神的にも限界を超えていました」

「他に道はあったはずだ」

「ありました。ケアマネージャーに連絡をするなり、しかるべきところに相談に行けば2人とも救われていたと思いません」

「……………」

閻魔様がふいに口を閉ざした。顔を見られまいとうつぶんでいる。

うつぶむいて…………泣いているのだ。あの閻魔様が…………格の高い仏が、大粒の涙をポロポロ、ポロポロとこぼしている。

「なぜ、お前ほどの霊格の者が…………殺してはいかんとわからなかったのか…………なぜ、思いとどまることができなかったのか…………」

魂の旅は長い。俺もチビ太も130回を超えている。1回目の人生から始まって、何度も生まれ変わりたくさんの経験をする。霊格は少しずつしか上からないからだ。5〜6回の人生で高い霊格に上がる近道などないのである。

つらいこと、苦しいこと、悲しいことなど、避けて通りたいいことを数えきれないくらい経験して、忠之は今の霊格にまで上ってきた。コツコツと小さな善行を何代にもわたって重ね、天に貯金もしてきた。

閻魔様は何千年もかかって続けてきた、その努力をつぶさに見て知っているのである。

今回、忠之が犯したことは霊格を一気に下げてしまう。閻魔様はそれがどうしようもなく悲しく、やるせないのだった。

霊格が低い者がわからないのは仕方がない。だから大声で

叱るし、怒鳴る。しかし霊格が高い者はわかっていて罪を犯すのだから、裁くほうは何倍もつらくて切ない思いをする。

閻魔様の涙を見た忠之は申し訳なさそうにしていたが、それでも、殺した妻は以前の妻ではないし、人間として機能していなかったのだから、早めに終わらせてあげて良かったのではないかと考えていた。妻もあの姿で生きるのは嫌だったはずだ、と。

閻魔様はモニターを持って来させ、

「忠之よ、真実をその目で見なさい」と、ひとことだけ言った。

人間には見えない真実の世界

映像は妻の認知症が進行したあたりから始まった。当時の日々が映し出される。忠之は再体験することが苦痛なように顔をしかめていたが、目はそらさなかった。

それは妻が、自分自身をわからなくなった頃に始まった。魂が体を抜けるのだ。時々、体から出て、肉体のそばに立っているのである。脳が自分という心を認識できなくなると、肉体は肉体でしかなくなる。そうなる魂は肉体と分離するのだった。

認知症が進行していても、時たま普通の意識に戻ることがある。脳がうまく心を認識しているわけで、そのような時は魂と肉体は分離していない。

魂が横に立っている状態の、つまり、肉体だけの妻は、うまく機能していない脳を使ってしゃべったり、行動をする。

忠之に向かつて、「あっちへ行け！ バカやろう！」と大声で叫ぶこともあった。

しかし、横に立っている魂の妻は、忠之に手を合わせて謝っていた。ごめんね、忠之さん、ごめんね、と。そのような状態になった妻の魂もつらいのだった。

食べ物を床に吐き捨てている時も、魂の妻は、聞こえないと知りつつ必死で謝っていた。

「忠之さん、つらいね。悲しいね。ごめんなさい。本当にごめんなさい。許してね」

魂の妻は、膝をついて拭き掃除をしている、年老いたゴツゴツの忠之の手や、丸くなった背中を優しくさすりながら涙を流していた。目から出したもので汚れた服を着替えさせているその横でも、

「夕方のお風呂まで放っておいても構わないのに……ありがとう。清潔にしてくれてありがとう」と、感謝をしていた。魂の妻はすべてを理解していて、こうして見えないながらも、忠之を励まし、感謝をし、謝罪しているのだった。

忠之が声をあげて大泣きしている時は、横で魂の妻も一緒に泣いていた。突っ伏して泣いている忠之の背中を、一所懸命に撫でている。ごめんなさいを繰り返しながら……。

これから罪を犯すであろうことを予測した妻は、自分が殺されることは平気だが、愛する夫が罪を犯すことを止めなければ！ と思った。が、しかし、肉体の脳が心を認識できないので、肉体が使えない。止めようがないのだった。

魂の妻は忠之に寄り添い、涙でくしゃくしゃになっている忠之の顔を撫でた。

親が幼い子どもにするように、優しくゆっくりと、あふれる愛おしい気持ちを手に入めて、そっと撫で続けた。そして最後に言った。

「忠之さん、ありがとう」

モニターを見終えた忠之はその場で号泣した。

認知症になっても妻は昔の妻だったのだ。肉体の脳が機能しなくなっただけで、あの優しい妻はいつもそばにいたのである。

日々の現実は厳しかったが、心の目で見れば、魂の妻を感じできていたかもしれない。

「お前はこのことをすでに学んでいたはずだ」

閻魔様の言葉で、そうだった、と忠之は思い出した。

いくつか前の人生で忠之は重度知的障害者として生まれたことがあった。難しい人生にチャレンジした転生だった。

その人生では、脳が機能していなくても、自分という存在は別にあることを知った。

魂の自分は、落ち込んだり悲しんでいる親に声をかけ、親の背中を撫でながら励め励ましていたのだ。ありがとうもたくさん言い、ごめんなさいもたくさん言った。

ああ、そうだった、すっかり考えていけば魂の妻に気づいていたかもしれない、と忠之は思った。

「曇った目で見えるから真実を見失う」

閻魔様の言葉が忠之に染み込んでいく。

妻がもう人間ではないから、と決めつけていたが……殺したのは自分の都合だった、自分のエゴだった、と忠之はしんから罪を悔いた。

「今、この世界に戻ってきて、思い出せることがあるだろうか？」

「思い出せること……ですか？ あ！」

忠之は生まれる前のことを鮮明に思い出した。

生まれる前に、人は人生の大まかな計画を立てる。大きな出来事だけを決める人もいれば、ある程度細かい出来事まできっちり決める人もいる。まったくの白紙、という人もいて、そこは自由になっている。

誕生から死ぬまで守護霊として守ってくれる高級霊と、一緒に計画を練るのだが、ソウルメイトと相談することもある。どこで出会うか、いつ出会うかなどを打ち合わせしておくのだ。忠之は妻と、京都で会おうと約束したのだった。そして、その先の人生を一緒に歩もう、と。その時に、妻が言った

「人生の最後に大きな勉強をしたいの」

忠之は知的障害者として生まれた経験があり、そこでとても大きな勉強をした。

人に世話をしてもらわなければ生きられない状態は、魂が常に周囲に感謝をすることになる。それも深い感謝だ。申し訳ないと思い、周囲の人をいたわる気持ちも常時持つこととなる。世話をしてくれる親を純粹に愛し、魂に湧く感情は尊いもので埋め尽くされる。それは魂にとって大きな学びになるのである。

だが、妻にはまだその経験がなかった。だから人間界を去る時に、大きな学びを得て戻りたいと言うのだ。

「どういう状況にするの？ ガンで死ぬことにする？」

「そうねえ……でも、高齢だったらガンになってもあきら

めちゃうわよね……認知症をやってみようかしら」

「いいよ。僕がサポートしよう」

「迷惑をかけてしまうけど大丈夫？ でもあなたにしか頼めないの……こんなつらい役目」

「僕にとっても学びになるからね、いいよ。頑張るよ」

「ありがとう！」

忠之は生まれる前に承諾していたのだった。あまりにも介護が過酷だったせいもあるが、嫌がる妻に介護サービズを受けさせたくないという優しさが、かえってアタとなった。

もっとちゃんと考えていれば、違う道があったはずだ、と忠之は心の底から自分が犯した罪を悔いた。悔いても悔いても、してしまったことは取り返しがつかない。

忠之は妻に心から詫びた。サポートすると約束をしておきながら、裏切ったからである。裏切った自分が許せない。いろいろな感情が忠之を襲い、忠之はこのまま消えてなくなってしまう、と本気で思った。深く深く反省をした。

それは心の浄化でもあった。

閻魔様は忠之に真実を見せることで、曇っている心を自分で浄化させたのだ。せっかく苦労して高い位置にまで来た魂である。なんとか落ちないようにしてやりたい、救いたいと閻魔様は考えていた。第1地獄へ行け、とひとこと言えば終わりなのに、それで済ませない慈悲深い仏なのである。

「閻魔様、私は、今やっと、自分が犯した罪の大きさ、身勝手さを知りました。そして、閻魔様をはじめ、ここにいらっしやる仏様が、人間を正しく導くことにどれほど尽力さ

れているかも知りました。私は罪を犯したことで、妻を裏切り、自分を裏切り、そして長い時間をかけて指導して下さった仏様方も裏切りました。申し訳ございませんでした。罪を犯して霊格が落ちますから、霊格が違う妻とはしばらく会えません。でも、努力を重ねてもとの位置まで上がります。いつかまた、あの笑顔の妻に会いたいです！」

閻魔様は静かに微笑みながらうなずいていた。

「ワシはもう二度とお前の顔は見たくない。お前とは……未
来永劫、会いとうない」

忠之はその言葉を聞いて、涙を流した。

「ここへはもう……二度と来ません」

神仏のなみだ ハート出版 桜井識子